

## 【一般口演3】 第14席

## 望問切一診断の機構一

神奈川 家本 誠一

漢方或いは鍼灸の診断は処方を選定或いは取穴の決定をすることであり、診断即ち治療である、といわれている。中国医学は此と異なる。現代中国医学に於ける診断は、八綱弁証その他に拠って、疾病に関する諸要約を体系的、総合的に決定してゆく作業である。此は古代医学に淵源する。

医学は疾病に関する認識と其れに対する行動より成る。認識を基礎医学と云い、行動を臨床医学と云う。診断は、治療、予防とともに臨床医学を構成する。素問、靈枢に記された診断は総合的、体系的にして且つ合理的である。

其の総合性は疾病に関するあらゆる要約を包括していることによって示される。即ち病因、病位、病理、経過、転帰、予後の判定から治療法の選定に至る諸部門を含む。其の総合性は診断の手技に現われる。古代の診断は感覚による官能テストである。感覚には視覚、聴覚、触覚、臭覚がある。此等の感覚を総動員して得られた情報を分析、判断して病の真相に肉迫する。此の官能テストを望問切と云う。ここでは此の望問切の情報收拾と其の解析に就いて考察する。

官能テストの情報收拾力は量的にも大きいとは云えず、質的にも良好とも云えない。古代の医師たちが、此の精巧とは云えない手段を駆使して、合理的にして有効な臨床医学を構築することが出来たのは、解剖による人体の構造に関する正確な観察と其の生理に就いての鋭利な洞察を基礎に持っていたからである。ここでは診断を支えた此等の基礎的認識に就いて検討する。